

図 5 - 3

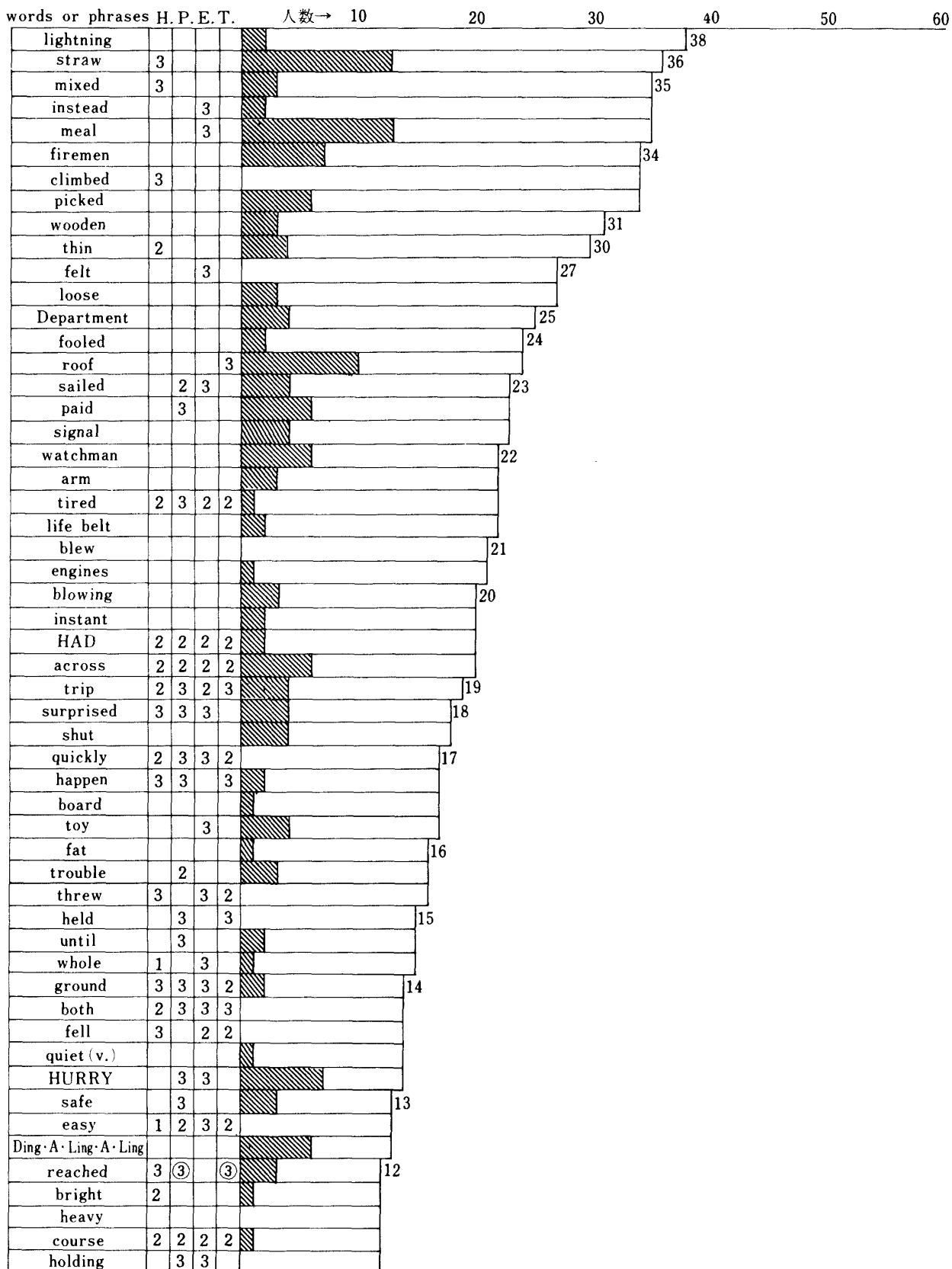
words or phrases H. P. E. T. 人数 → 10

wondered										12
ship	3	3	2							11
fun	2	2								
showed	2	①	2	2						10
sun	2	1	2	1						
quietly										9
careful	2	2	2							
sad	3		2	2						
hurried		③	③							
forget	3	3	1	2						8
still	2	2	2	2						
things	2	2	1	2						
Fire Station										
answer	1	1	1	2						
higher	①	①	①	①						
George										
walked	①	②	①	①						
broke	3	3	3							7
outside										
Ding-dong-ding-dong										
cried	2	②	②	②						
light	3	2	3	2						
first	1	1	1	1						6
own	3	2	3	3						
went away	2	2	2	2						
building	1	2	1	2						
bought	3	3	2	3						
boat	3	1	1	2						
thought	2	3	2	2						
more	2	2	2	2						
watched	①	①	①	①						
lucky	3									5
did	2	2	2	2						
jumped	2	③	③	③						
MUST	2	2	2	2						
large	2	1	1	2						
put	2	2	2	2						
nice	1	1	1	1						
him	1	1	1	1						
water	2	2	1	2						
wind	2	3	3	3						
with	1	1	1	1						4
at last	2	2	2	2						
was	2	2	2	2						
catch	2	3	2	2						
almost	2	2	3	3						
quick										
wall	1	1	1	3						
stopped	2	①	3	2						
someone	3	3	2	2						
post										
would	2	3	3	3						
wanted	①	①	①	①						
got	2	2	2	2						

words or phrases H. P. E. T. 人数 → 10

houses	2	1	1	1						4
looked down	①	①	①	①						
fly	2	2	1	1						3
where	1	1	1	1						
zoo	1		1							
cried	2	2	2	2						
tried	2	2	2	2						
live	2	1	1	1						
stood	3	3	2	2						
heard	3	2	2	2						
place	2	2	2	3						
try	1	2	2	2						2
brother	1	1	1	1						
street	2	2	3	1						
free	3	3	3	3						
get	1	1	1	1						
telephoned	3	①	①							
at once	3	3	2	3						
kind	2	1	1	2						
man	2	1	2	2						
been	3	3	3	3						
too	1	1	1	1						
took off	②	②	②	②						
now	1	1	1	1						
under	1	1	1	1						1
take	1	2	2	1						
to	1	1	1	1						
into	2	2	1	2						
and	1	1	1	1						
found	2	3	2	2						
little	2	1	1	1						
as	2	2	2	2						
himself	3		2							
hands	2	1	1	2						
dolls	3	1	2							
didn't	②	2	2	2						
FIRE	2	2		2						
but	1	1	1	1						
do	1	1	1	1						
bed	1	1	1	2						
through	2	1	3	2						
girl	1	1	1	1						

図5-2



注: 丸で囲んである数字は、その学年でそのままの形ではでていないが、原形又は現在形の形で出ているものを示す。

図5. 未知語一覧

▨ 推測語数

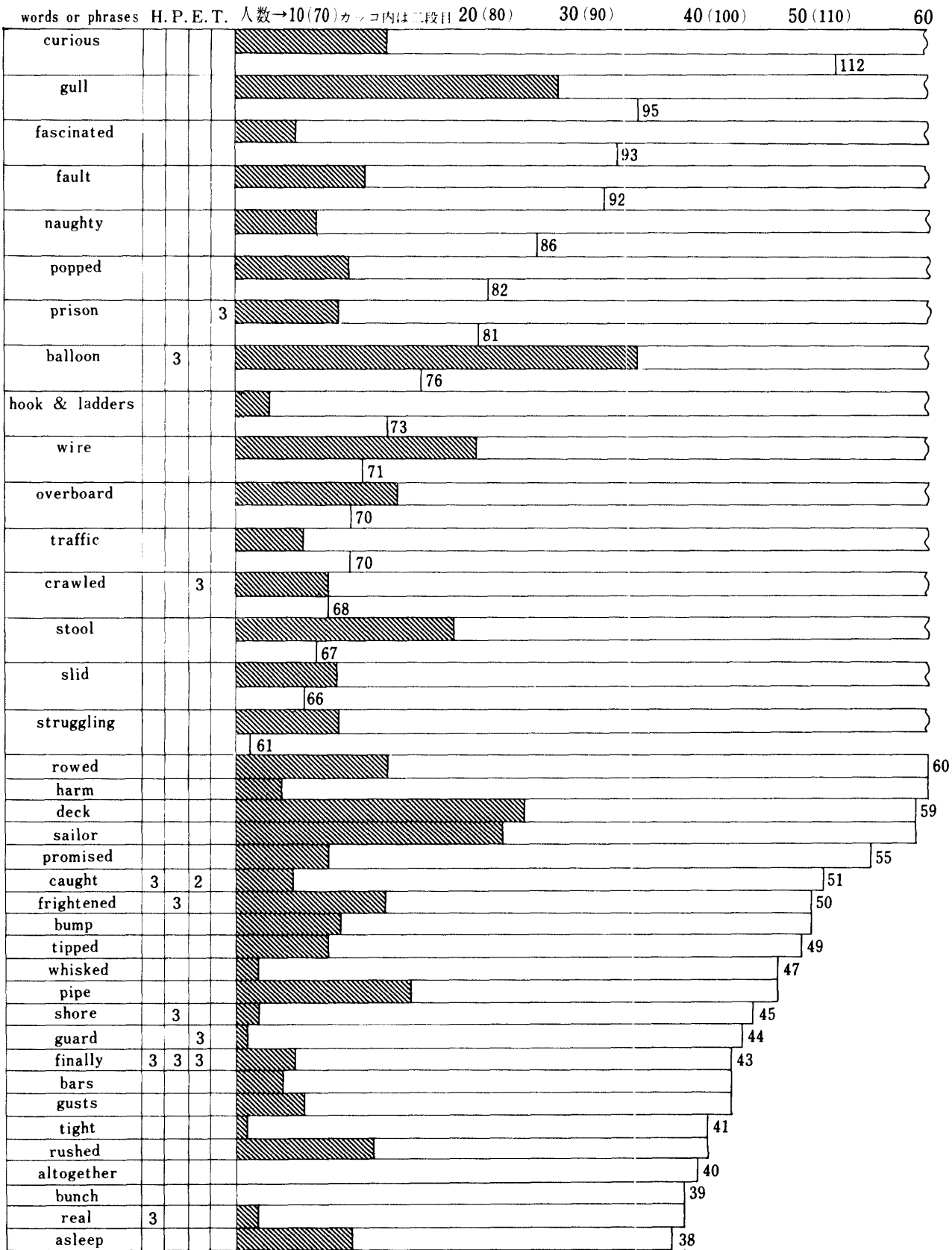
H : *New Horizon*

E : *New Everyday English*

図5-1

P : *New Prince*

T : *Total English*



注：H.P.E.T.欄の数字は中学に於ける学習年次を示す

図3．推測語数ヒストグラム

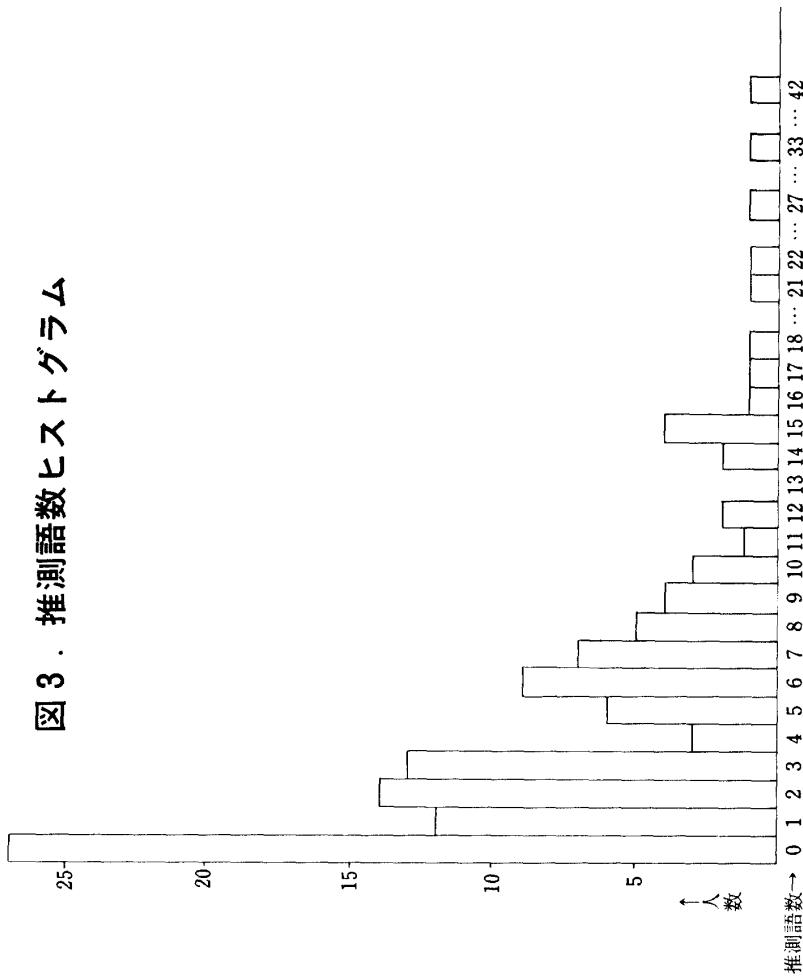


表1．要旨の評価 (総数115名)

専攻	評価	A	B	C	D
A専攻	A	7	21	6	0
B専攻	B	4	22	9	4
C専攻	C	14	17	9	2

図4．専攻別推測語数ヒストグラム

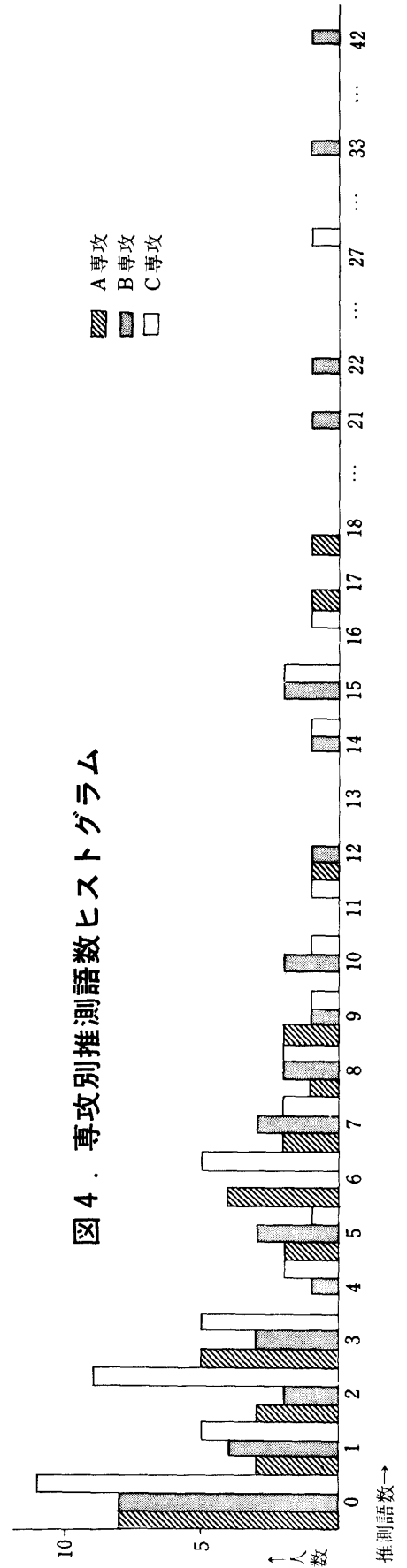


図1. OHP提示後の未知語数ヒストグラム

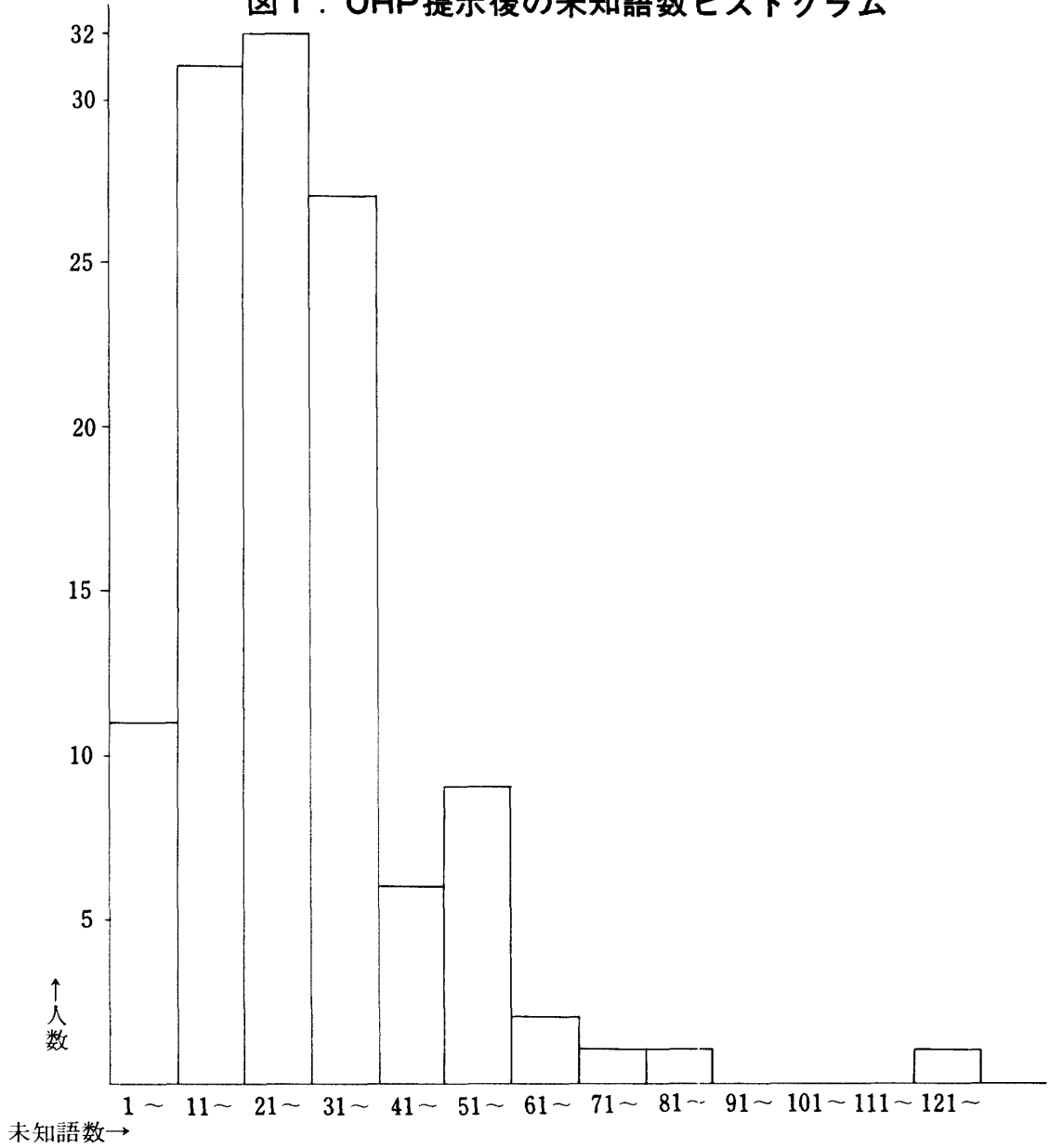
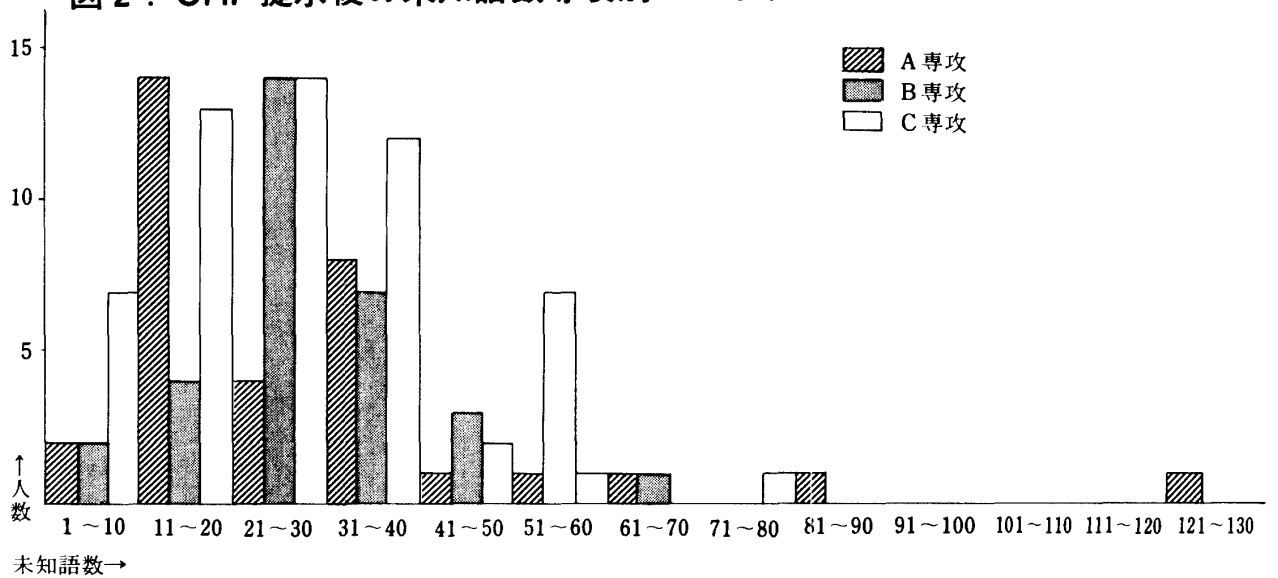


図2. OHP提示後の未知語数専攻別ヒストグラム



この調査に使った原本は、2才から5才迄アメリカで暮した筆者の長男が、幼稚園の先生から贈られて、当時まだ文字は読めなかったものの、暗んじて楽しんでいたのである。本学の学生の場合でも、話の大筋がとれるという事は、英語に対する抵抗をなくし、英語に親しみを覚えさせる事につながると思われる。

## まとめ

英語の基礎学力が充分でなく、英語に抵抗を感じている学生にとって、必修である教養科目の英語が苦痛の種である事は、先のアンケートからも明白であった。日本人の場合、英語教育は通常12才から始められるわけであるが、一般におこなわれている文法と訳読中心の方式による外国語学習は、左脳に強く依存しており、論理や抽象能力を鍛えるのには、極めて有効な手段であるといわれている。(注1)しかし、論理的な思考を嫌う傾向にある学生の場合は、従来の訳読方式は余り有効とは思われない。この様な学生をどの様に指導していくかという事は、簡単に答が出る問題ではないが、今回施行した予備的語彙調査の結果から、いくつかの指導上の留意点が示唆されていると思う。

まず基本的には、教室で予習の仕方そのものを学べる様な配慮をし、その中で推測の習慣を身につけさせる様にする。具体的には、推測の補助となる様な視聴覚教材を使い、簡単な筋の物語にできるだけ多くふれる様にする。この場合基本的な語彙をはじめに与えて、その用法を含めて確実に身につけさせ、和訳はさせずに、大筋をとる事を主眼に、読解力テスト、聴解力テスト等により理解度を確かめながら、できるだけ量をこなす様にする。肩ひじ張らずに英語に取り組める様にする為に、こうした授業のすすめ方は試してみてもいい一方法ではないかと思われる。こうして気楽に英語につきあう事を通して、日常生活の中でも、英語に限らずもっと言葉そのものに関心をもち、敏感になる様になれば、英語教育もより効果的になるのではないだろうか。

注1 角田忠信、P.77

### 参考図書

Rey, H. A., *Curious George*, Scholastic Book Services, N. Y., 1968.

角田忠信、右脳と左脳——その機能と文化の異質性——、小学館、1983.

*New Horizon*, 東京書籍

*New Prince*, 開隆堂

*New Everyday English*, 中教出版

*Total English*, 秀文出版

wonder, rush, fool 等、本文中ではそれぞれ動詞として使われているものだが、文脈から動詞として使われているという事を判断せずに、それぞれ「電話」「時計」「不思議」「ラッシュ」「馬鹿」等と書いている。又未知語でわざわざ辞書をひいたと思われる fly, whisk も「蠅」「小ぼうき」ととっているものが多く、動詞として使われているという事に気付いていない。更に quiet は動詞としての意味を書く様にとという意味で、動詞の頭文字の(v)を書きおいたとわざわざ説明したにもかかわらず、形容詞としての意味が頭にこびりついているのか、「静かな」と書いた学生が大半を占めていた。又せつかく動詞としての意味を書いている、ここでは「静める」という意味ではなく、「静まる」という意味にとるべきであるという所迄、思い及ばない者が多かった。所謂自動詞と他動詞の区別がついていないのである。この事は reach についてもいえる事で、動詞として使われている事はわかっていても、辞書のはじめに出てくる他動詞としての意味「に到着する」を即座に書いてしまい、ここでは自動詞としての「手を伸ばす」という意味にとらないと意味が通じない事に気付かない学生が目立った。

形容詞と副詞の混同もかなり多かった。特に tight の様に形容詞、副詞同形の場合は、辞書に形容詞形が先に出ている為、ここでは「しっかりと」という意味の副詞として使われている事に気付いた学生はほとんどいなかった。もう一つかなり目立った間違いは、発音又は綴りの上の類似からくる思い込みによるものである。例えば、trouble を travel と、gust を guest と、hurry を hungry と、pipe を pie と、instead を interested と、meal を meat と、sad を bad と、といった具合に取り違えているものが多い。思い込みのかなりの部分は、本文の参照が充分であれば、文脈からその意味ではおかしいという事に気付くはずであるが、この単語はこういう意味だという固定観念にとらわれてしまうと、別の可能性に思い至らない。

ところで今回の調査にあたり、時間的制限があった為できた所迄で提出させたので、学生により訳した長さはまちまちではあるが、参考の為、一応単語表と共に提出させた和訳をみると、要旨の出来より芳しくない者がかなりいる。この事はどういう事を意味しているのだろうか。まず考えられる事は、和訳の場合はどういう事をいっているかを考える事なく、日本語におきかえただけで事足りりと思ってしまう傾向が強いという事である。これは授業中に指名した時にもよくみられる事である。「どういう意味ですか。」ときくと「今答えました。」と答えるので、「という事はどういう事をいっているのですか。」と重ねてきくと、いともあっさりと「わかりません。」という答が返ってくる。唯機械的に英語を日本語におきかえただけで、自分にもわからない意味の通じない事を、平気で口にしてしているわけである。今回の調査の和訳にもみられる様に、書かせた場合でも主語が次々と入れかわり、文になっていない様な日本文がかなり目につく。自分だけが理解していて表現に問題がある場合もあろうが、自分自身よく理解できずに書いている場合もかなりある様に思われる。内容もわからずに、唯機械的に英語を日本語におきかえているだけでは、英語がおもしろいわけがないのは自明の理であろう。ところがある程度の長さのものの要旨を書くとなると、必然的に少なくとも自分の言葉で意味を考えて書く事を要求される。その結果、今回の調査の場合でも、要旨の評価では、D評価をうけた6名を除き、他の学生はC評価以上、即ち話の大筋はとれていた。つまり和訳の場合は語いにふりまわされ易いのに対し、要旨の把握に於いては、語いを足がかりにして考えているといえるのではないだろうか。もともと

みれば、未知語の半強は中学で既習のはずのものであり、中には中学一年のはじめに学習する様な単語に迄、丸印をつけたものもあった。つまり中学の段階で当然学習しているはずの基本的な語いが、身につけていない学生が多いという事になる。特に不規則動詞の過去形を覚えていない学生が目立つが、hurried, tried, criedの様に規則動詞でさえも、語尾のyをiにかえてedをつけるだけの綴り上の変化が少し加わるだけで、わからなくなってしまうものがある。英語はラテン系の言語等にくらべ、動詞の活用が比較的簡単であるにもかかわらず、頻出度の高い基本動詞の活用すら覚えていないのでは、予習が苦痛になるのは自明の理という事になる。

又 O.H.P.を通して推測できた語をみると、視覚的な補助という性質から当然の事ながら、balloon, gull, deck, sailor, wire, stool, pipe といった順で、推測できた数が多い事がわかる。しかし一番推測できた数が多い balloonでさえも、この単語を未知語としている人数の半分以上の学生しか、O.H.P.によって推測できていない。つまりしっかりみて理解しようとするれば、当然推測がつく様なものまでも、推測できていない学生がいるという事になる。更に himself, higher, man's, blowing 等、接尾語の知識を活用すればわかる様なものも、わからないとあきらめてしまう。中にはsがついて複数形になっただけでわからなくなってしまう者、大文字で書かれているだけで分らなくなってしまう者もいる事がわかった。deck, lucky 等は外来語として日本語にも入ってきている語であるが、外来語からの推測も意外に少ない結果となっている。又、動詞句、副詞句、名詞句といったフレーズを単位として考えず、個々の単語としてとってしまっている者がかなり多い。この事から、単語が文脈の中ではじめて明確な意味を持つという事に気がつかず、パラグラフの展開を追う中で推測して意味を考えるという習慣が、身につけていない事がうかがえる。

次に今回の調査の最後に、和訳と共に提出させた単語表の意味の取り違い数の専攻別平均をみると、A専攻17、B専攻16、C専攻15となっている。誤りの平均値が高いA専攻では、誤数がわずか4という学生がいる一方、全専攻を通してもっとも多い37という学生もいて、ばらつきが多い。ちなみに全専攻を通して意味の取り違いがもっとも少なかったのは、C専攻誤数3の学生であった。単語表の意味の書き入れが未完だったり、誤りが多い学生の場合、単語表を渡されてから要旨提出迄に一週間、単語表提出迄には三週間の期間があったにもかかわらず、家で辞書にあたっていないか、あるいはあたっていたにしても、本文との参照が充分でなかった、又は間違っただけの思い込みが多かった事等がその原因として考えられる。尚第三週、第四週のクラスでの作業の時は、辞書の使用を許可していたが、家であらかじめ辞書をひいてこなかった学生は、時間に追われて気があせり、見た事のある単語は本文と関連づけて考える事をせずに、そのまま単語表に書き入れた可能性も大きい。又、辞書にあたる場合、機械的にひいている弊害も考えられる。fire engines, hook-&-ladders 等は、O.H.P. で絵が出て来ているにもかかわらず、特に後者の場合は、綴りそのものがハイフンでつながれているにもかかわらず、一連のまとまりのものとして考えず、個々の単語の意味をばらばらに書いているものが、かなりの数にのぼっている。

ここで単語表に関して、本文中に使われた意味が正しくとれていない単語についてもう少し詳しくわしくみてみたい。まず名詞の意味をすでに知っている単語、例えばtelephone, watch,



別につきあわせてみると、丸印11、内、推測語5という学生が、要旨D評価という極端な場合を含めて、丸印即ち未知語の比較的少ない学生が、要旨ではCランクに評価され、更には第四週の終りに提出させた単語表の意味の誤りが多く、丸印の数を大巾にうわまわっている場合が相当数みられるのである。それ故今回の調査の結果に関しては、前出のヒストグラム及び平均値を出す事にとどめ、それ以上の統計的処理は行わなかった。

以上述べた様に、今回の調査は、残念ながら統計的処理に足る信憑性に欠けているとはいえ、予備的調査として、本学での教養科目としての英語指導上いくつかの留意点が浮き出ていると思われるので、以下こういった点を中心に、調査結果をみながら考察を加えたい。

まず各専攻別に最初に丸印をつけた語数の平均をみると、A専攻33語、B専攻41語、C専攻28語であった。この内推測のついた語数(図4参照)の平均は、A専攻4語強、B専攻7語強、C専攻5語弱であった。B専攻が7語と他専攻にくらべ、推測のついた語数の平均が高いのは、図4から明らかな様に、C専攻に27語という学生が一人いるものの、B専攻には42語を最高に、33語、22語、21語と四人も推測できた語数が極端に多い学生がいる為である。42語推測のついた学生は、最初に丸印をつけた語数も101とB専攻では最高であったが、要旨はAに近いB評価を得ており、33語及び22語推測のついた学生も、丸印それぞれ58語、44語、要旨もそれぞれB、Aと評価されている。又、A専攻で全専攻を通して最高の141語丸印をつけた学生も、推測語数17で、要旨はCに近いとはいえ、一応B評価の範ちゅうにあり、同じA専攻で81の丸印に対して推測語数18の学生も、要旨はB評価となっている。一方、最初に68語丸印をつけた前出のB専攻推測語数21の学生の要旨の評価は最下位のDであり、このような例外はあるものの、概して推測語数がある程度あると、要旨の把握ができ易い傾向がみられ、逆に推測語数0の学生は、これ又例外はあるものの、要旨の評価がC又はDとふるわない場合が多く、授業中の平常点の評価も概して低い傾向が認められる。ちなみに要旨D評価をうけた学生は、A専攻にはなく、B専攻で4名、C専攻で2名の計6名となっている。尚、要旨は第二週目に提出させたので、欠席者の関係で、必ずしも第一週目の調査対象総数と一致していない。(表1参照)

更に第四週目の終りに提出させた単語表の意味の誤りの数が、最初につけた丸印の数を大巾に上回っている場合は、要旨のC評価と符合する場合が多くみられるし、授業中の平常点の評価も低い傾向が認められる。一方要旨、和訳共A評価を得ている学生の丸印の数は30前後、その内推測のついた語数は10前後、単語表の誤りの数が一桁といった像がうかびあがる。こうみえてくると、丸印の数があまりに少ない場合はわからない単語を見過している可能性が強く、分っているものと分からないものとの明確な区別がつかない、更に物事に取り組む態度そのものがあいまいであるという事が考えられる。

図5は未知語につけた丸印の数及び推測のついた語につけた罰点の数を各単語(熟語を含む)別に丸印の数の多い順に図示したものである。尚、中学校教科書H(*New Horizon*)、P(*New Prince*)、E(*New Everyday English*)、T(*Total English*)欄の数字は、その単語の中学での学習年次を表している。即ち1は一年次の、2は二年次の、3は三年次のそれぞれの教科書に出てくる事を示している。

図5から明らかな様に、ほとんどの学生が未知語として印をつけたcuriousからはじまって、丸印の多い単語は、やはり中学校の教科書には出てこないもので占められてはいるが、全体的に

1. O.H.P. で絵本をみせながら、筆者が普通の速度で音読してきかせる。
2. 次に単語表を O.H.P. で提示し、筆者の後について読ませる。
3. 再び絵本を O.H.P. で提示し、筆者が少しづつ区切ってゆっくり音読し、後について読ませる。
4. 絵本を O.H.P. で提示しながら、再び筆者が普通の速度で音読してきかせる。
5. 要旨を書かせ、提出させる。

### 第三週及び第四週

1. 本文のプリントを参照しながら、先に渡した単語表に、本文で使われている意味を、各単語又は熟語ごとに一つずつ選んで記入させ、提出させる。
2. 尚参考用に、あわせて本文の和訳をさせ、提出させる。

### 調査の結果及び考察

調査用テキストは総数923語で、新出語いは296語、その内中学校の教科書(*New Horizon* 準拠)に出てくるものが212語含まれている。更にこの212語の音強にあたり、新出語い全体からみれば音弱にあたる144語は、文部省「中学校学習指導要領」に必修として指示された490語に含まれるものである。但し文部省指定の490語の中には、不規則動詞を含めて動詞の活用形は除かれている。尚集計に当っては、くり返し出てくるものは除外し、新出語いのみを集計の対象とした。第一週目の作業の結果は、図1のヒストグラム及び図2の専攻別ヒストグラムに示してある。図1及び図2の横軸の数値は、O.H.P.をみても尚かつ分らなかった語数であり、従って最初に丸印をつけた数は、この数値に推測のついた語数を加算したものとなる。図3は推測のついた語数の全体の分布を、図4は専攻別の分布を示したものであり、未知語につけた丸印と推測のついた語につけた罰点との関係は、図5に各単語別に示してある。尚第一週の調査の対象となった学生数は、調査実施当日欠席した者を除く住居学専攻(以下A専攻と記す)33名、児童学専攻(以下B専攻と記す)38名、社会福祉学専攻(以下C専攻と記す)50名、計121名であった。

ところで第一週目の作業そのものは、英語力に余り関係なく、誰にでもある程度は機械的にできる事柄であったにもかかわらず、指示に従わなかった学生が相当数あった事、例えば、指示された記号を使わずに勝手な記号を使う、印をつけてあるのかないのか分からない位薄くあいまいなつけ方をする、協同作業でない事をあらかじめ断っておいたにもかかわらず友達と相談する等々、資料の信憑性にかかわると思われる事が多々みられた。中には仲々作業にかからず、個別に注意すると慌てて取りかかり、時間がたりなくなったものもあった。又作業そのものに関しても、分からない単語に印をつけずに見過している可能性が全体的にみてかなり高い事、この事は前に同じ単語が出ているにもかかわらず、前出のものに印をつけず、後出のものに初めて印をつけたものがしばしばみられる事からも推察される。もちろん見過すという事は、誰にでも多かれ少なかれあり得る事ではあるものの、その頻度が全体的にみてかなり高いという事は、作業がいいかげんに行われたと思われる節が少なからずあるという事にもなり、従ってこの調査の未知語につけられた丸印の数の多少が、必ずしもその学生の語い力を反映しているとはいえないといわざるを得ない。事実、第二週目に提出させた要旨をA B C Dの4ランクに評価したものと丸印の数を個人

一因となっていると思われる語いの問題を、もう少し多面的に把握する事、及び英語に対する学生の抵抗心を少しでも和らげる事を目的に、指導の一環として、筆者が考えた一連の予備的語い調査を施行した。

### 試案の作成及び調査の方法

予習の仕方については、開講前生活学科全専攻の学生を対象に、学内オリエンテーションの折に、あらかじめ次の様な指導をしておいた。まず辞書のひき方について、わからない単語がでてきても、いきなり辞書をひかない。一つのパラグラフを通して読んで、どういう事が書かれてあるのか、大体の要旨を把握した後に再び読みかえし、推測をしてみても尚かつわからない場合、辞書をひく。あるいは推測があたっているかどうか確かめる為に、辞書をひく。つまり唯機械的に単語を単語帳に写すのではなく、その文ではどういう意味に使われているのかを文脈との関係から考え、取捨選択する。更に少なくともどこがわからないのか、わからない個所を明確にして、クラスに出て欲しい事等、要望しておいた。

ところが、実際にはこの様な準備をしてクラスに出席している学生はまれで、先のアンケートの解答にもみられる様に、大部分の学生にとっては予習そのものが苦痛で出来ない、というのが現状であった。予習ができていなければ、クラスに出て来ても積極的に授業に取り組めないのは当たり前で、もともと好きでない英語がますます嫌いになっていく。嫌いになれば尚の事予習をする気がおこらない、という悪循環をくり返す事になっていったと思われる。つまり英語に対する取り組み方、予習の仕方そのものを、授業の中で指導していく必要性にせまられたわけである。

予習ができない要因としては、わからない単語の数が多いという事だけではなく、推測する習慣が身につけていないという事も大きいのではないと思われる。この仮定にたって、次の様な予備的語い調査の試案を作成し、あわせてこの調査の施行を通して、実際の推測指導を試みた。調査用のテキストとしては、推測しやすい様に、簡単なストーリーでしかも絵という視覚的補助手段のあるアメリカの絵本、*Curious George* by H. A. Rey, Scholastic Book Services, N. Y. を選んだ。まず字の部分のみすべてタイプしてプリントすると共に、絵本そのものをオーバーヘッドプロジェクター (O.H.P.) 用の特殊フィルムにコピーし、あわせて本文中から難かしいと思われる単語及び熟語65を選び、単語表を作成して学生配布用にプリントすると共に、一部 O.H.P. 用特殊フィルムにコピーした。調査は推測指導をかねて、各専攻とも授業時間中に四週にわたって実施した。

#### 第一週

1. まず字の部分のプリントを配り、筆者が普通の速度で音読するのをききながら、分らない単語に鉛筆で丸印をつけさせる。
2. 次に O.H.P. を使って、特殊フィルムにコピーした絵本をみせながら、筆者が再び普通の速度で音読し、それで意味の推測のついた単語には、丸印の上に鉛筆で罰点をつけさせる。
3. 作業終了後単語表を配布し、辞書にあたっておく様指示する。

#### 第二週

# 教養科目としての英語指導の問題点

——予備的語い調査を中心として——

付 岡 京 子

教養科目の語学は、一部の例外的な学生は別として、概して嫌われる科目の筆頭であろう。初めて接する第二外国語の場合は、目新しさも手伝って興味を示す学生も多いが、中学、高校で英語が嫌いになっている学生にとっては、短大に来て迄何故又英語をやらなければならないのか、という様な気持になるものがあるのも事実であろう。そもそも英語を必修科目とする事自体、議論のあるところであろうが、その事の是非はさておき、現在必修科目である現状の中で、少しでも興味をもって英語を学べる様にするにはどうしたらよいか、特に本学の様に偏差値によらない選抜をうたって開学した短大の場合、問題はより深刻である。

筆者はたまたま開学年度、生活学科の全専攻にわたって教養科目の英語Ⅰを担当する事になったのであるが、辞書をほとんど使わずに読めるであろうと思って速読用に選んだテキストの予習に大部分の学生が追われ、英語の授業が苦痛になっているとのうわさが、開講後まもなく耳に入った。筆者としてはこれ迄にない程ゆっくりと、一文づつ丁寧に黒板に原文を板書し、説明したつもりであったが、授業がわからないという声は減るどころか、日を追うに従って大きくなっていく様であったので、1. 英語Ⅰのクラスに何を期待しているのか、2. どのような点が不満なのか、3. 具体的にどうあってほしいと思っているのかの3項目を柱に、学生に無記名でアンケートをとってみた。第1の項目に関しては、「何も期待していない。唯単位が欲しいだけだ。」という解答もあって、無記名の為か、少くとも一部の学生の本音が出た結果が得られたのではないかと思われるが、今回の解答で一番がく然とさせられたのは、第2項目に関しての「進み方が速く、予習が追いつかない。」「辞書をひく回数が多くて、それだけでうんざりしてしまい、全体の意味をとる事ができない。」「単語はわかってもつながりがわからない。」等々、予習そのものに問題をかかえている学生が多いという実態であった。第3の項目に関しても、「訳を全部黒板に書いて欲しい。」、あるいは「プリントにして配って欲しい。」という迄あって、専攻の如何を問わず、英語の力をつけて自分で考える、更には英語的な発想法にふれ、新しい見方、考え方を学んで欲しいとの筆者の願いとは相入れない様な希望に接し、予習の問題と合せ、本学での英語Ⅰの授業に対して、根本的に考え直す必要を感じさせられた。

そこで学生にはかって、総復習ができる様な総合教材にテキストをかえると共に、予習の癌の